

令和7年度浜松市地方創生推進会議

1 日 時 2025 年 9 月 10 日（水）14：00～16：00

2 場 所 本館5階 庁議室

3 出席者 委員 10 名

（石川雅洋委員、永吉実武委員、小林淑恵委員（オンライン）、中村順委員、伊藤篤志委員、大橋泰介委員、寺本政司委員、石川善太郎委員、鎌田裕子委員及び山名副市長（座長））

事務局 3 名

（企画調整部長、企画課長、企画課長補佐）

4 傍聴者 傍聴 3 名、報道関係者 2 名

5 概 要 以下のとおり

1 開会

（事務局による司会進行）

2 副市長あいさつ

皆さま、改めましてこんにちは。座長を務めさせていただきます山名でございます。

皆様方におかれましては、本日は大変お忙しい中お集まりをいただきまして、誠にありがとうございます。また、日頃より皆様方にはそれぞれの立場から、市政につきましてご理解ご協力を賜っておりますことを重ねて御礼を申し上げます。

本会議は本市の総合戦略を着実に推進するとともに、より実効性のある取り組みにするために、市内のそれぞれ皆様方、産・官・学・金・労・言・士（師）の各分野からご意見をお伺いするために、設置をさせていただいたものでございます。

国におきましては、地方創生の推進に関しまして、本年6月「地方創生2.0基本構想」を策定いたしまして、その中で地方創生2.0は、地域の住民や産・官・学・金・労・言・士（師）等が一体となって実現を目指すものであり、みんなで取り組むもの、みんなで実現を目指す社会像ということをうたっております。

本市におきましても、そうした地方創生2.0の動きを踏まえまして、本年3月には「浜松市地方創生総合戦略」を策定いたしまして、「元気なまち・浜松」の実現を目指して、「まち・ひと・しごと」の創生を一体的・総合的に推進をしているところでございます。しかしながら、地方創生は行政だけで到底実現できるものではございませんので、ぜひ地域や企業の皆さんと一緒にやって取り組みを行ってまいりたいと思っております。ご協力をよろしくお願いいたします。

また、本日は野村證券株式会社の和田理都子様より、人口減少対策に関しましてご講演をいただく予定でございます。和田様には、ご多忙のところ、講演をお引き受けいただきましたことを、改めて感謝申し上げます。

講演後には、和田様も交えた意見交換を予定しております。

それでは、地方創生の推進に向けまして、皆さまそれぞれのお立場からご議論をお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

3 委員自己紹介

(石川雅洋委員)

皆さん、こんにちは。浜松商工会議所の副会頭をやっています石川と申します。よろしくお願いいたします。商工会議所では工業関係ということで、産業の中でも特に製造業の担当をさせてもらっています。事業は自動車部品をつくっていきまして、足回りのボールジョイントという部品をつくっています。トヨタ、スズキほか、カーメーカーにはだいたい納めているということで、海外にも進出しています。

特に浜松は製造業が多いということで、今日もいろいろ勉強しながら意見が出せたらと思いますので、よろしくお願いいたします。

(永吉委員)

初めまして。静岡大学情報学部の永吉でございます。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

私の専門は、情報学部には所属しておりますが主として経営学でございます。また、本年度は、情報学部地域連携室長を拝命しており、浜松市への貢献に努めてまいりたいと考えております。何卒よろしくお願いいたします。

(小林委員)

静岡文化芸術大学の小林淑恵と申します。本日はオンラインにて失礼いたします。

私はこの会議4年目ということになります。労働経済を専門にしております、ライフコースで人を追跡していくような調査をやっております。5年ほど前にこちらの大学に着任する以前は、文部科学省にいらしまして、博士人材の追跡ならびに学力調査などの実施や分析をしております。そういった視点を超えて、さらに昨今では地域福祉ということに関心を持っていらしまして、静岡県と連携をして障害者アートの活動などもしております。

さまざまな立場の方と今回一緒ということで、勉強させていただきたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

(中村委員)

静岡銀行西部カンパニーの中村と申します。皆さんよろしくお願いいたします。

静岡銀行地方創生部が発足して今年で10年になります。そのような中、地域共創の高まりの中で、私のような地方共創戦略担当というポストが2年前ほどに置かれまして、西部カンパニーでは私が4月から着任しており、2人目の就任になります。

担当エリアは浜松市以外に、静岡県西部である湖西市から御前崎市までの地域となります。8年ぶりに地元に戻ってきて、こういった業務をさせていただいておりますので、浜松市のためにいろいろなことを前向きにやっていければと思っておりますので、皆様、どうぞよろしくお願いいたします。

(伊藤委員)

浜松いわた信用金庫の伊藤と申します。よろしくお願いいたします。

私は現在、営業統括部という部署で、市役所の前のビルで今2年間仕事をさせてもらっていますが、直近が磐田市の豊田町、その前が掛川、その前が袋井中央というかたちで、中東遠の自治体で支店長を務めさせていただきました。ただ、生まれも育ちも浜松で今も浜松から通っております。よろしくお願いいたします。

(大橋委員)

浜松市労働教育協議会委員の大橋と申します。私は浜松ホトニクス労働組合の書記長を務めておりまして、その代表として上部団体の連合の浜松地域協議会、そこで副議長を務めている関係で、こちらに出席させていただいております。

現業の方では製造を主に担当をしている者でございます。われわれは労働組合という立場ですので、若年層、この中では若者の意見に一番近い立場でお話ができるのではないかなと考えております。若者の人口減少が大きな問題となっている浜松市に、少しでもお力になればいいなと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

(寺本委員)

中日新聞の寺本です。平素は大変お世話になっております。この会議の委員は昨年につき2年目です。前任が名古屋本社編集局長で、報道畑を歩んできた私は、このような行政の会議を取材することはありましたが、まさか委員として参加するとは思っていませんでした。

弊社東海本社は来年でちょうど設立45年の節目を迎えます。長年お世話になってきた浜松市さんに何か恩返しができれば、と思っています。地方創生という、いわゆる大きい主語ではなくて、浜松市の再生・創生といったミクロの視点で意見等言えればいいかなと思っていますので、どうぞよろしくお願いいたします。

(石川善太郎委員)

静岡新聞社・静岡放送浜松総局の石川と申します。今年の6月に本社の編集局長からこちらにまいりました。ちょうど30年前に一記者として浜松に勤務しておりました。出身は磐田郡竜洋町(現磐田市)で、すぐ川向こうです。

30年ぶりに来た浜松はだいぶ変わっております。そういうまちがいろいろ変わっていることを自分でも学びながら、これからの在り方ということを、皆さまと一緒に考えていきたいと思います。よろしくお願いいたします。

(鎌田委員)

聖隷福祉事業団の鎌田でございます。いつも大変お世話になっております。聖隷福祉事業団は1930年に設立しまして、現在1都7県に208施設、保健・医療・福祉・介護、こちらの4つの事業を展開している法人でございます。昨今、取り組みもありますけれども、医療経営がだいぶ逼迫している状況ですとか、介護人材の不足等々、さまざまな課題を持ち合わせています。そしてこの4月に、外国人の定着・採用・育成・キャリアアップ、その辺も含めて聖隷国際人材センターというものを、人事企画部内に発足いたしました。こちらのもこれからの医療・福祉・介護の世界で、いろんな方々に活躍していただけるような取り組みもしています。

また引き続きこちらの委員として、総合戦略ですとか地方創生の検討に参画できることをうれしく思っていますし、一緒に勉強をさせていただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

4 地方創生に関する市の取組状況の報告

(事務局から資料に基づき説明)

- (1) 第2期総合戦略の評価について
- (2) 第2世代交付金について
- (3) 企業版ふるさと納税について
- (4) 地方創生に関する若者座談会の報告

5 人口減少対策に関する講演

講演者：和田 理都子 氏(野村證券株式会社 金融公共公益法人部 主任研究員)

テーマ：人口2/3激減時代の到来と「新」成長戦略

自治体詳細分析と近未来予測：浜松市を中心に

6 意見交換

(石川雅洋委員)

和田さんの話のインパクトがすごく強く、自分は商工会議所の産業関係で製造業なので、心に突き刺さるというか思い当たるところがたくさんありました。人口は減るし労働人口が減るということも分かっていて、自動化もやっていこうなんてことは言っているが、それどころじゃないぞという話もよく分かりましたし、あれだけ1人当たりの出荷額が低いというのは、自分にしてみるとかなりショックでした。かなりいろんなことをやっているつもりなのですが、実際は浜松って、商工会議所もそうなのですが、入っているのは13,000社ぐらいあって、製造業でいうと従業員が20名、10名以下というところがほとんど。9割以上はそういう会社なので、そういうところの生産性をどう上げるかというところが1つ大事なことだと思います。

あとガテン系というのは本当によく分かります。製造業で自動車の下請けって、うちもそうですけど、鍛造であるとか鋳造であるとか、かなり製造としても男性の力に頼っているところがまだまだあるので、逆に言えばそこはやらなければいけないことだなということを思いました。

女性の活躍というところも同じだと思うので、今は工業高校などでも、いろいろコミュニケーションをとりながら採用ということはやっているのですが、少しでもものづくりのことを分かってもらいながら、そういったところでも進んでいることをしっかり出さないといけないと思います。女性についても、自分は理系であるだとか、ものづくりに興味を持ってもらえるような理系の女子というのが絶対的に必要だと思うので、そういったところがこれから浜松でも生き残るところになるのかと思いました。

子どもが左下がりではなくフラットになっているというのは、川崎はすごいなと思いました。何だかんだって浜松は出生率が下がり続けているということですが、川崎というのはそれを抑えてきているということを表していますよね。

(和田氏)

川崎の場合は外から入ってくる勢いも強いんです。あと浜松が一番注視しなければいけないのは、直近の5歳以下の動向だと思います。5歳から18歳までは構成比でみて全国平均より多いのですが、5歳以下を見ていただくと、全国平均がそれ以下までストーンと落ちている。つまり直近の5年にものすごく少子傾向が強まる方向に変わったという状態が見える。2050年の子どもたちが今より大幅に少ない予測になっているのは、まさに今浜松でこの5年に起きたことを、未来に向けて回復できない状態、ということになる。今なにをするか、が次世代に関してはとても重要です。

(石川委員)

分かりました。製造業として1人当たりの生産性を上げるのは必須だと思うし、それは自分たちで頑張るんですけども、浜松市に言おうと思ったのは、さっきの女性の活躍は製造業だけでなく、やっていることはすごい正しいと思うし、すごい項目が多いんですが、逆に言うとどれが重点か分からない。どれが優先か分からないと思っていたが、例えば今の和田先生の話だと、少なくとも女性の活躍の場を増やすためにはどうしようであるとか、18歳の溝で戻すためにはどうしようであるとか、これから出生率の引き止めにかかる場合に、いったい何をしなければいけないというのは、それはもう製造業だけではないと思っています。

データによって問題点がより明確になったと思うので、それぞれやるべきところはあるし、製造業は逆に強みになればいいと思うし、人も製造業の強みになっていけばいいと自分は思っています。また、教育もやっていかなければいけないと思う。

ただ、自動化であるとかデジタル化というところは、従業員10人以下のところでもしっかりできるような体制をどうするんだということは、1つ大きな部分だなということをおもいました。女性の活躍のところと出生率の低下を、どう止めていくかというところは、全体でやっていくんだろうなということをおもいながら聞いていたので、データで突きつけられ大変勉強になりました。どうもありがとうございました。

(永吉委員)

和田先生のご講演は数字に基づく明確な裏付けがあり、非常に説得力のある内容であったと感じております。大学に勤務する者の立場から、学生の動向についてご報告申し上げます。

情報産業の重要性が今後一層高まるというお話がございましたが、情報学部にも所属する者として、学生の就職状況について申し上げますと、大変恐縮ではございますが、現状として就職に困っている学生はあまり多くはありません。情報学部を身に着けた学生に対する需要が非常に高いことを実感しております。

地方国立大学として地元貢献すべき立場であることは十分認識しておりますが、首都圏や東名阪地域を中心とした大都市圏での需要が極めて大きく、結果として地元就職する学生が少なくなっています。加えて、本学部は地元出身者の割合が比較的低いことも影響しています。

さらに、近年は就職するにあたり保護者の意向が大きく作用する傾向があり、保護者としては全国的に知名度の高い企業を望まれるケースが多くなっています。情報学を学んだ学生は大都市圏においても需要も高いため、残念ながら地元に残る学生が少なくなっていることに、私どもも強い問題意識を持って取り組んでおります。しかしながら、学生の希望を否定することはできず、このような点にどのように取り組んでいくかが大きな課題だと考えております。

浜松にはすでに全国的にも知られた企業が多く、恵まれた地域であると感じておりますが、さらに地域としての魅力を向上させ、全国的な知名度をより一層高めることも重要であると考えます。それにより、保護者からも支持される就職先として地元企業の評価が高まり、学生が地元の魅力を感じられる環境づくりが進むことを期待しております。

(小林委員)

私も人口学というようなことをかつて学んだことがありまして、例えば人口転換理論とか合計特殊出生率とか、そういった細かな知識というのは、ある程度持っているのですが、今日、和田先生にお話しいただいたような、産業と絡めて考えると、1次産業、2次産業、3次産業とか、様々な指標を総合的に見て判断するという、そういう視点はまだまだ足りないなというふうに感じました。

どうしても専門の中に閉ざしてしまっていて、この数値を自分の研究とか専門のところにだけに活かして、総合的に市の戦略を考えると、県の戦略を考える、国の戦略を考える。そういうところまでいってないなということを強く感じました。いわゆる総合知というところが不足しているんだなと思いましたので、今日のお話はまさに総合知ということを示していただいたということで、さすが野村證券さんと率直に感じたところでございます。

今永吉委員から話がありまして、優秀な学生が出て行ってしまうということがあったのですが、本学の場合は少し事情が違いまして、実は女性・男性の定員は設けていません。ただ女性が圧倒的に多くなっている。7割が女性という状況になっています。

女性の場合はやはり親元から通える、地元から通える浜松の大学、県立の大学に通ってくれて、そしてここにある有名な大手の企業に就職してくれるというのが、一番コストもかからなくて、親も心配なくて、非常に安全なライフコースであるわけなんですね。そういうところを目指している女性がいて、優秀な女性が実はたくさんここにとどまっています。浜松が全業種に強く、イノベーションが起こりやすいというお話がありましたけれども、それをけん引していくのが、ここにいる実は優秀な若い女性たちではないかなというのを私感じました。ぜひ積極的に企業の中で登用して、活躍の場を与えていただければ大変うれしく思います。

それからもう1点、最近私、ChatGPTがすごく楽しくて、今まで研究の企画書を作るとか申請書を作るというのには散々使っていたんですけども、今はスマホに入れてとても便利に使っています。1日中 ChatGPT と話しているのですね。何がいいのかというと、日々の生活、例えば子育ての疑問とか、今日夕飯に何を作ろうとか、人間関係どうしようとか、そんなことを全部スマホに話しかけて解決の糸口を作ってくれるのです。ですから、ジャストアイデアなのですけども、AIの活用というのを一部

の専門的な仕事の部分だけではなくて、広く市民が使えるようになったときに、どこにいても住みやすいまちになるのではないかというふうに単純に思いました。以上でございます。

（中村委員）

冒頭の自己紹介のときに私、8年ぶりの浜松とお話したのですが、そのうちの5年が、先ほど先生がおっしゃった川崎市に住みながら横浜市に通勤していました。武蔵小杉の隣の駅に住んでいまして、まさにここに出ているデータの有り様を目の当たりにしながら暮らしていたなと思いました。

しかし、浜松は海も山も川も自然環境は良く、子育てにも向いているし、産業もそれなりにある。よく言われていることですが、どうしたら人が安心して住めるのかということの前向きに考えていかなければいけないと、再認識させられた講演で、金融機関としてできることをしっかりと検討していきたいと思いました。

こういう場なので、静岡銀行でやっている取り組みを、少しご紹介させてもらえればと思っています。私ども2025年の3月に「富士山・アルプスアライアンス」という業務提携を発表させていただきました。これは、私ども静岡銀行と山梨中央銀行、長野の八十二銀行の3行で包括業務提携を結び、地方創生やまちづくりといったことを持続的に協業していく取り組みです。

この3行が同じような課題、例えば高齢化とか労働力不足という課題が共通していたり、また、豊かな自然や基幹産業がしっかりあり地域のポテンシャルが似ているということで、3行で組むことになりました。

そのような中で、移住促進チームを草薙にある本部に設けて、様々な取り組みをしています。最近の事例としては、例えば6月に、人口減少や労働力不足に対応するために、移住応援ローンという商品を開発して、移住前に住んでいた場所の売却期間であつたり、転居期間の緩和など転居後の生活の安定に配慮した商品設計の住宅ローンを設計し、経済面から支えていく取り組みをしています。

9月1日には、富士山・アルプスアライアンスファンドを約30億で組成して、3行連携を密にして伴走していく取り組みをしています。

いずれにしても3行にとどまらず、他の金融機関であつたり、浜松市をはじめとした自治体様や企業と連携し、「仕事・住まい・金融」に対してしっかりご安心いただけるような取り組みという事例を増やしていく方針で、私ども静岡銀行は取り組んでいます。

(伊藤委員)

先生、今日はありがとうございました。

いろいろ貴重なデータをいただいたのですが、私は浜松市の指標の中で実は一番気になったのが、昼夜間人口比率が 100 を割っているということでした。静岡、沼津も 100 を超えていますし、浜松というのは静岡県の西部である程度中核の市だというのは、たぶん皆さんも同じ認識だと思います。いわゆる首都圏、関西圏、中京圏を除いた、中核になる仙台、新潟、岡山、広島、北九州、福岡、熊本とかも見てみたんですけど、いずれも 100%を超えています、この 100 パーセントを割っているというのが、実際に住んでいる私としても肌感覚にあります。

年次別に見てみたら直近 10 年しかなかったんですけど、10 年前、5 年前と比べても遡減している。この数値をどう捉えればいいのか分からないんですけど。浜松市さんの戦略の中にも、「持続可能で創造性あふれるまち」というのがありますが、この創造性というのが、単にまちなかに何かをつくるということだけではなくて、いろいろ文化的なものとか、多様性とか革新性とか、そういうものがすごく、まちづくりの特に中心のところで求められているのかなという気がしています。

ここ数年、近年まちなかにいろいろな企業の本社とか学校が来るという計画を、いろいろお聞きしていますので、そういうところが今後のこの比率のところに、どういうふうに出てくるのか、注目していきたいなと思いました。ありがとうございました。

(大橋委員)

私からは 2 点ほど意見をさせていただきたいと思います。

1 つ目は、和田さんの講義を聴いての意見となります。和田さんの講義の中で、これから人口減少というのを受け入れた中で、どのようにやっていくかというものを考えないといけないというところを講義いただきまして、私も激しく同意いたしました。この対策のところで、今日はちょっとお話はあまり出てこなかったのですが、DX だとか AI だとかいうところを駆使して、なんとか生産性を高めていかなければいけないということも激しく同意いたしました。

ですが、かといって少子化対策を捨ててしまっているというわけでは当然ないと思っています。何とかして出生率を上げていかなければいけない。ではどうしたらいいかというふうに少し考えてみたんですけど、私としては労働条件をよくする。具体的に言うと労働時間を少なくする。これが非常に重要だなと考えております。

それというのも、北欧諸国であったり、フランスであったり、労働時間が少ない国というのは出生率が高い傾向にあるからです。自分に置き換えてみても、今の状況、いろいろと会社の方でも改善が進んでいて、育休が取りやすかったりするのですが、そもそも子どもが生まれる前の段階で時間がないと、子どもをつくろうという気

すら起きないと思うんですね。なので、根本的な労働時間を少なくするというのが非常に重要だなと思っております。

とはいえこれから労働人口は減っていく中でありますので、生産性を維持して、なんとか今の産業を維持するのだけでも非常に大変な状況だと思います。これ以上、さらにそこから生産性を上げて労働時間を少なくするというのは、かなり大変なことではあると思いますが、なんとかやって行かなければいけないかなと感じました。

もう1点なんですが、これは浜松市への意見にはなるんですけども、若年層、特に女性の人口減少が問題視されていると思います。この若者からの意見のところ、イベントを増やしていったりだとか、公共交通機関を増やしていったりだとか、いろんな意見があったかと思いますが、私としては一番大事なのは、公共交通機関の発展というものが、非常に不可欠であるというふうに考えております。

LRT など新たな公共交通機関をつくっていかないと、結局若者というのは移動の足がないというところで集まってこない。もちろんそれによって、公共交通機関がないので学校ができない。学校ができないから若者が集まってこないのではないかなと思います。公共交通機関を発展させて学校ができる。それから若者が増えていく。若者が増えていくと、当然消費活動は活発化されていきますので、先ほど和田さんの講義にもありましたように、浜松市内のお店、店舗数というものがいろいろ少ないよという話であったかと思うのですが、そういったところも増えていくといった好循環が生まれるのではないかなと思いますので、公共交通機関の発展を、中長期的に見て何とか進めていただきたいと思います。以上です。

(寺本委員)

和田さん、ありがとうございました。これは致し方ないと思うのですが、エコノミストや経済界の方から人口減少に関するお話を聞きますと、国民を経済力を支える労働力や税収を確保する納税者の視点でしかとらえていないのではないかな、と思ってしまいます。

近代日本は明治維新に人口が伸びていくのですが、1939年に一時的に下がっています。この時、日本は軍国主義の時代で、国が音頭を取って「産めよ 増やせよ」というスローガンで人口を増やすよう求めているのです。これなんかは、国民を兵力とみているんですね。ですから、今、行政や経済界がこぞって人口減少への危機感を口にしている状況を見ると、「あ〜、今度は労働力というか、企業戦士を確保するためか」と思ってしまうのです。

出生率が下がっているのはある意味、女性の社会進出が進み、女性の社会的権利が向上したことが背景にありますし、それはそれで個人の価値観が尊重される社会に日本がなったことで喜ばしいと思います。

問題は国全体の人口が減少する中、多くの人が都市部に集まり、そのあおりで地方の人口が急激に減少するということではないでしょうか。

前任地の名古屋でも最近、若い女性が東京に転出する傾向が顕著になっています。地方では今、出生率を上げたり、定住者を増やすために子育て支援を一生懸命やっているんですが、そうやって街ぐるみで育てた子どもらはある年齢に達したら進学や就職などで東京へ行ってしまっている。地方が東京への人材供給源の性格を強めているのは何とも皮肉です。やはりそういった若い人、特に女性の方を地方に引き留めるというのが、地方から都市への移動を食い止める最大のポイントではないかなと思います。

そういう意味で言いますと、浜松の街づくりに一言言いたいのですが、夜が非常に暗いことです。私は旧東海道（国道 152 号）沿いに住んでいますが、幹線道路なのに街灯が明るくないですね。あれでは、若い女性が 1 人で歩くのは怖いですよ。僕みたいなおじさんも「オヤジ狩り」に遭うんじゃないかと、びくびくしています。やはり、夜道が暗いと、街の治安が良くない印象になります。

浜松といえば、青色発光 LED でノーベル賞を受賞した天野先生は浜松西高ご出身です。また、浜松に本社を置く浜松ホトニクスは光産業をリードする世界的に有名な企業です。これだけ光に関する発明や技術があるのに、そのおひざ元である浜松市の夜はなんで暗いのだろうか、という疑問があります。人口減少を食い止めるためにまずは街灯をもっと整備し、夜の街を明るくすることではないかと思います。

先ほど大橋さんもおっしゃっていましたが、今は働き方改革でずいぶん就業時間が減っています。1 日のうち 8 時間働いて、寝る時間が 8 時間とすると、残り 8 時間は余暇になり、自分が好きなように使える時間となります。そう考えると、仕事が終わった後に外食したり、美術館や映画館を訪れる機会などが増えるわけで、そうした趣味や余暇を楽しむ施設を備える街の魅力が大切になってくると思います。これからは雇用の場だけでなく、余暇を楽しむ街の魅力もセットでないとなかなか若者にアピールできないと思います。中心市街地のまちづくりにもう一回目を向けていただければ、若い人も付いてくるのではないかなという気がしています。

（石川善太郎委員）

和田先生、今日はありがとうございました。事前にこの第 2 期総合戦略の資料を読み込んでいろいろ考えてきたんですけど、和田先生の話に圧倒されて、全部自分が考えてきたことが陳腐化されてしまったという印象なんですけど、1 点だけ思ったことがございました。

今回の総合戦略を拝見して思ったのは、理念的な部分で合併 20 年というものを踏まえた浜松市の目指すべきところというのは、ちょっと見えてこなかったなと感じまし

た。たぶん合併前の浜松市が基本目標を策定したとしても、今のこの現戦略と変わらないんじゃないかなということを率直に感じました。

今日、和田先生のお話の中で、浜松市についていろいろ分析を聞かせていただいた中で、資料に「一層の集住化と徒歩生活可能地区の整備促進を」と提言されているのですけれど、まさにこれからの浜松市は、中心部を中心としたコンパクトシティを目指して行く。そうなった場合に、中心部を取り巻くように立地している旧市町、そこにどういう役割を委ねていくのか、どういうふう to 存在意義を持たしていくのか。そういうような観点を踏まえて、少子高齢化、人口流出というものが一層顕著な旧市町の未来というものを見据えていない。そういう前提で旧市町をどう位置づけていくかが明確になっていないと、市民全体への説得力というものも持ち得ないのではないかなと、今日お話を伺って改めて感じたところです。

(鎌田委員)

先生どうもありがとうございました。

私からは女性活躍の問題だとか、労働力の確保だとか、人口減への取り組みは、本当にまさしく重要な課題だと思っています。ただ、やってるけど足りない、やりたいけど進まない、このような点がまだまだあるかと思います。

お話を聞いて3点、感想と意見をお話しさせていただきます。まず1点目ですけれども、やはり労働力不足、IT、AI活用、高齢者、女性、外国人の活用、副業、兼業、時差出勤、単日、短時間、ありとあらゆることを考えつつやっていますけど、福利厚生的なことも含めて、それを整えていけばいくほど、その空白の時間を埋める人がいないという、次から次への問題が出てきて、十分整えきらないという課題も持っているのが実情です。

例えば、不妊治療であっても、そのような治療費を福利厚生の一部にとってあげようと思っても、「それで長く休まれると、ほんとに現場回らないんだよね」という現場の声も聞きますと、その辺の舵取りのところの難しさを感じています。その辺が、やってもやってもなかなか十分には行かないなというところがあります。

それから外国人について、もうすでにうちはやっていますが、うちの職員は非常勤を含めて1万6千人、常勤が1万人ですが、180名弱の外国人の方々が働いてくれています。その中で、特に介護職については、EPA介護福祉候補者、特定技能の方、留学生を経て介護の現場に入ってくれる方、うちはやっていませんが技能実習生、それから育成主導に変換していく。このようないろんな制度があるわけですけど、とにかく制度が分かりにくかったり、煩雑化したり、手続きが複雑的で分からないという法人さんも多々あります。

うちの法人からもそういうところを発信していこうと、国際人材センターを立ち上げたわけですが、そういうところも、行政ともっとコラボしながら整備してあ

げられるような、現場への発信というものもしていければなというふうに思って、行政へのお願いもしたいと思います。

それから、最後にですが、採用活動をしていますと、男性と女性、同じ採用枠で来ましても、男女平等とはいえ、女性の出産だとか育児だとか、これはもう変えられない現実があるので、どんなものでサポートしたとしても、ライフステージの中で、女性が持つ負担というのは減らし切れないという実情があります。そこをどうやって埋めていくかということもやらないと、入れたはいいけど、さて、40代の女性を見てみると役職にも就いていない。なかなか仕事を重視した生活に切り替えられない。というような実情がありますので、そういうようなところにも目を向けながら、何か解決策を見いだしていけたらなと改めてと思いました。今日はありがとうございました。

（石川雅洋委員）

1つだけすみません。産業をどんどん変えていかなければいけないという中で、製造業で1人当たり生産性を上げるだとか、女性活躍であるだとか、新しい産業を興すということで、自分たちで当然やっていこうと思っています。

言ってみれば製造業もモデルチェンジしなければいけないタイミングだということを、たぶん和田さんは言われていると思うんですけど、和田さんの思う魅力ある製造業というか、どういう形の製造業がこの浜松には適するのでしょうか。それこそ繰り返すになってしまいますが、ガテン系であるだとか、そういうのは身にしみたところがあるんですけど、和田さんがもし浜松の製造業にアドバイスをしてくれるというならば、キーワードはたくさんあったと思いますが、製造業が変わっていく方向は、どういったところを特に思われますか。

（和田氏）

私は入社が野村総合研究所で総合サービス業、転籍先が金融業で、製造業の現場が分かってないですけど、資料に産業構造と特化係数というのがあります。特化係数が1を超えている産業というのが、外から稼げる産業と言われ、そのまちを特徴づける特化が進む産業と言われているんですね。

並び順は、付加価値額が多い順に左から並べていますが、特化係数に関しては付加価値の順番とは関係なく、例えば浜松の場合は、農林漁業が1番大きな数値となっていて、その次に来るのが複合サービス業。これは農協・漁協などを含みます。3番目に来るのが製造業で、製造業は付加価値額が一番高いけど、特化係数も1を大きく超えていて、上から3番目に特徴的な産業と言われている。これらの1を超える産業はもう1つの特技があって、それは、モノやサービス業は外へ、お金は中へという外から稼ぐ産業と言われています。

3 番目に重要な製造業で付加価値額も一番大きいけれど、その向こう側に見える景色にどんなものを求めるのか。産業分類中で浜松では全然目立たないのが情報通信業で特化係数 0.26 なんですけど、このグラフを東京都で作ると、東京都で特化係数が高いのが情報通信業なんですね。

東京都の中でも渋谷区とか品川区とか、いくつか特定の場所に集積しているところがあって、情報通信業というのはすべての産業の付加価値額を高める、1 人当たり生産性を高める基盤となる技術を提供しうる産業だと言われています。

つまり、製造業だけが頑張らましようと言っても 1 人当たり生産性は上がらないし、ガテン系だけど、そこに情報通信業が入ってきてくれてコラボをすると、職業の中にももちろん力がなければ絶対できないところと、このシステムは私がメンテしますといった、あなたは筋肉、私は頭脳という、そういう部署ができるはずなんですね。

5 人、10 人という小さな職場でできるかということと、例えば商工会議所のお立場で情報通信業とのマッチングみたいなことができていたら、それこそ浜松市内に立地している製造業の業種の幅が広いだけにイノベーション的なものが起こりやすくなるだろうと思っています。

（石川雅洋委員）

1 人当たり生産額も含めてですよ。そこに女性の雇用にもつながってくるのではないかということですか。

（和田氏）

優秀であればあるほど、生産性を上げる真剣な取り組みに対して、私がやってあげましょう！ って来てくれるかもしれないですね。農業と製造業ほどデジタルとのマッチングが生産性向上に効くものがないという説を見たことがあります。

（山名副市長）

ありがとうございます。最後に和田様からご意見をいただければと思います。お願いします。

（和田氏）

ありがとうございます。皆さまからのご意見も、まちへの思いも、今日はこういう立場で聞かせていただいて、プラットフォームの存在がとても重要だと思いました。プラットフォームがあって、いろんな立場の方々がそれぞれの思い、価値観、世代間でというのもあるでしょうし、僕らの頃はこうだった、私の頃はこうだった、私は今子どもですとか、そういったものを語れる共通の場になることが大切だと思いまし

た。そういう意見を様々な立場から語り合いつつ、目指すべき浜松の姿というものがあるんだろうという方向に集約していくこと、その方向に向けて知恵出しにつながるということが重要なのだろうと思っています。

本来の姿から逆算的に語ると、浜松の目指すべき姿というものが実現したとき、その未来になると、私はどの年齢層もほぼ同数、図にすると凹凸の少ないフラットな人口構成に変わっていくんだろうと思っていますし、フラット型になって初めて、本当の意味で「持続可能性」という言葉が見えてくるとと思っています。では持続可能性ってどうやったら高まるんだろうというのを突き詰めて考えていくと、いろんな産業があり、教育があり、文化があり、こうしたものが時代に合わせて実っていく、そういった中で、最後に運行指数みたいに追いかけてくるのが合計特殊出生率だと思っています。

目指すべき未来。まちの総合力があって、働く場所があって、男女が自分らしくきっちり働ける、生きられる。労働時間が短いだけではなくて、生活が充実している。デンマークなどで、私が出張に行って話を聞いたときには、朝6時半とか7時から働き、その代わり午後3時には退社するそうで、インタビューで午後4時まで会社に残っていたら、会議室から出てみたら誰もいなかったという。午後4時で誰もいない。みんな午後3時に帰ったから。

夜がものすごく早く来る北欧の冬でも、早めに子どもを迎えに行って、午後4時にはおうちに帰って、家族でご飯を作って、夜はろうそくつけてそれで友達と一緒に食べて、8時間寝ると。だから8・8・8の時間とおっしゃっていましたが、真ん中の8がめちゃくちゃ充実している。そのためには午前8時半出社とかではなくて、ぐっと前倒しして、夜寝るまでの時間がまとめて使えて長いというのも悪くないみたいです。そういうメリハリ。

日本の総労働時間はもう短くなっていて、アメリカとは比べものにならない短さで、アメリカはまだ長いんですね。だけど、その中で例えば北欧ができているのにこっちができていない特徴として、一日の自由に使える時間をのばすために、時間をぐっと前倒しにする自由な職場というのもいいかと思っています。

この浜松というのは、資料を見ていただくと、0~4歳の人たちが5~9歳になったときに、浜松に入ってきている傾向があって、子どもが生まれない傾向は強まってきているけど、子育てのまちとして、この浜松を含めた三遠南信、隣の豊橋も含めて、子育てという意味ではすごく選ばれているところでもあります。これに教育を併せて、ここのまちで子育てしたら塾へ行かなくても、中学を出るころには英語と情報系のプログラミングはだいたいできますぐらいのところまで教育内容を整備して宣伝できればよいですね。流山市みたいに「母になるなら流山」って。具体的には何を言ってるかわからないけど、ものすごくはっきりしたメッセージですよ。

子育てするなら浜松として、中学出たときには親を遙かに超えたデジタル英語人材だといったことができれば、今いる子どもは出て行かずに、むしろその教育を求めて外から入ってきてくれる。大学まで行き、浜松の卒業生としてブランド化されるということにもなるかなと思っています。

私は今日、皆さまの会議の土台のデータみたいなものを見ていただきました。それぞれのご意見がおありだと思いますが、10年後に測ったら、私70歳近くになります。さすが浜松、あの時みんなやってくれたなというような、そんなディスカッションが出てくることを期待しています。ありがとうございました。

(山名副市長)

本当に今日は、これから浜松市が地方創生を進めていく上で、様々なご意見、多くのヒントをいただきました。ありがとうございました。

それでは、時間もまいりましたので、意見交換は以上とさせていただきます。

7 閉会

(事務局)

ありがとうございました。

大変熱心なご議論をいただきまして、誠にありがとうございました。以上をもちまして、本日の内容は終了となります。長時間にわたりありがとうございました。今日の議事録につきましては、改めて文書でご報告をさせていただきます。

これもちまして、令和7年度浜松市地方創生推進会議を閉会いたします。